九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『長生殿』訳注（十二）

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/9589

出版情報：中国文学論集. 34, pp.89-102, 2005-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『長生殿』訳注（十二）

竹村則行

凡例

一　『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『暈刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。

二　本訳注に当たり、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。

塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）
徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）
曽永義『中国古典戯劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）
蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）
岩城秀夫『長生殿』（平凡社東洋文庫、二〇〇四年）

三　本訳注では、主に前記参考書に於いてなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。

四　**［曲牌名］**に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、**［ゴチック文字］**の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、および唱や動作の主体を示す卜書きの部分は、底本の通りに小字で示した。

五　訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六　訳文は、**［ゴチック文字］**で示した「唱」部分の訳出を含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて平易な日本文となるように留意した。（「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。）それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七　前稿「『長生殿』訳注（一～三、六～十）」は『中国文学論集』二六～三十三号（九州大学中国文学会、一九九七～二〇〇四年）に訳載し、また、同（四・五・十一）は『文学研究』九十七～八、一〇二輯（九州大学文学部、二〇〇〇～〇一年、〇五年）に訳載した。

八　本訳注（十二）（第四十三～四十五齣）は、二〇〇三年十二月～〇四年六月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、竹村が新たに浄書した。この間の演習に参加した院生は次の通りである。

竹之内美樹香　・　土屋　聡　・　有木　大輔　・　陣内　孝文
陳　　翀　・　西田真理子　・　赤嶺　明乃　・　大渕　貴之

第四十三齣　改　葬

【商調引子】【憶秦娥】（生が二人の侍従を連れて登場）**心傷むさなか、天下の形勢が一転して長安に還御することになった。長安に還御する折、貴妃を葬った馬嵬のこの場所に至れば、足も踟躕（ちちゅう）って帰ることができない。**

朕は蜀から長安へ還御することになったが、変乱の最中に俄に命を落とした貴妃をまだ手厚く葬っていないことに心が痛む。そこで勅諭を下し、真珠や玉で作った装束を用意させ、墳墓を改葬することを命じた。改葬には朕が親しく臨むつもりであり、それでこうして馬嵬駅に駐蹕しておる。（涙する介）貴妃が絶命した仏堂のこの梨の樹に対すれば、何とも痛ましい限りである。

【商調過曲】【山坡羊】つくづく恨めしいのは、山河が昔のままであること[1]、何とも痛ましいのは、貴妃の霊魂が血に染まってさまよっていること。このうら寂しい小さな仏堂に、緑の葉を茂らせた一本の梨の樹。私は空しく嘆くが、

墓中の貴妃はもっと苦しんでいることだろう。月夜に照らされ、貴妃が珮玉を鳴らして宮中に帰る姿はどこにもなく、今や**その春風の如き美しい絵姿を**想像することもできない。（丑がひそかに登場）（生に拝見する介）申し上げます。私め、玉旨を奉じ、貴妃様の新しい陵墓の築造に取りかかり、準備が整いました。どうか上皇さまが臨幸され、親しくお墓を開けられますように。（生）では出発の命令を伝えよ。（丑）かしこまりました。（命を伝える介）兵士ども、出発じゃ。（雑が兵士に扮して登場し、上皇を導いて行く介）「この馬嵬坡の泥土の中に、今や貴妃様の玉顔はなく、命を落とした所が空しく残るのみ。」（墓に着く介）（丑）申し上げます。この墓標の白楊の木の下が、貴妃様を埋葬した所でございます。（生）おお、これは、つる草が伸び、風が悲しく吹き、陽光も陰っている。貴妃よ貴妃、何とひどく悲しませることよ。（哭く介）**大声で哭き、貴妃の霊魂はどこにいるのか、泣き叫ぶ。すすり泣き、哀しみのあまり、涙枯れるまで哭く。**

（老旦、雑、貼、浄の四名の女工がくわを持って登場）（老旦）上皇様がいらっしゃったわ。私たち早く行って、お墓を開けるのに控えましょう。（丑）お前たちは、みな女工か？（一同が返事をする介）（丑が生に申し上げる介）女工どもが揃いました。（生）命令を伝えよ。兵士どもは退くように。高力士、お前が女工の監督となり、心して墓を開けるのだ。（丑が返事をし、命令を伝える介）（兵士が退場）（女工達が墓を掘る介をする）（一同）

［水紅花］小高い岡に向かい、ひたすら鍬や鋤を下ろして掘り進む。その当時、貴妃様の墓標にした白楊の樹のあたり、今やその玉体は、香は失せて翠玉は冷たく、蟻が這い回り、白い肌は干からび、美しいお顔は見る影もないでしょう。（一同が驚く介）三尺（約一メートル）ほど掘り進めると、空っぽの穴はあったが、貴妃様の玉体は見当たりません。**よもや本当に雲や雨と化して飛び去り、影も形も無くなったものか。ただ、そのあたりには芳香がたゆたい、我らの衣服の裾に纏いつくばかり。**[2]

（浄）あら、香嚢があるわ。（丑）取って私に見せよ。（浄が香嚢を渡し、丑が受け取ってそれを見て、大声で哭く介）ああ、貴妃様！ お前たちは、しばらくあちらで控えておれ。（一同が返事をして退場）（丑が生に申し上げる介）天子様に申し上げます。お墓を開けましたところ、中は空洞でした。玉体をお包みした錦の褥（しとね）や殉葬した金の釵（かんざし）、螺鈿の盒（こばこ）も全く見当たりません。墓穴にただ一つあった香嚢がこれでございます。（生）そんなことがあるのか！（生

が香嚢を受け取り、それを見て大声で哭く介）おお！　この香嚢は、まさしく曾て貴妃の誕生日に長生殿で霓裳羽衣曲を舞った折、朕が彼女に賜ったものだ。貴妃よ、そなたは一体どこにいるのだ？

［山坡羊］寒々と物寂しいもぬけの墓、玉妃はどこへ行ったか、杳として知れない。仮に玉体が遺体をくるんだ錦の褥（しとね）と共にふわふわと塵や埃に化したとしても、どうしてあのかちかち硬い金の釵（かんざし）、螺鈿の盒（こばこ）も見つからないことがあろう。香嚢だけが空しく墓中に残っていたとは、どう考えても理由が分からぬ。泰山の神を呼び出して問いただすことができぬのが残念だ。（思いをめぐらす介）高力士、ひょっとしてお前が記憶違いをしているのではないか？（丑）私めはあの日、白楊の樹皮を半分削り、墓標として題記致しました。どうして間違えることがありましょう。（生）では、盗掘されたのか？（丑）もし盗掘されたのなら、どうして香嚢を残しておきましょう？（生が呆然として黙り込む介）（丑）私めが思いますに、古来、神仙には屍解というものがございます。貴妃様は、あるいは屍解して仙人になられたのかも知れません。ちょうど、あの黄帝を葬った橋山の御陵に黄帝の衣冠塚があるのと同じです。この香嚢は貴妃様がご臨終の際に身に着けられていた物、これを新しいお墓に埋葬されれば、黄帝の衣冠塚と同じことです。（生）なるほどその通りだ。高力士、ではこの香嚢を珠襦でくるみ、玉匣に入れ、葬礼に従って埋葬するのだ。（丑）かしこまりました。（生が大声で哭く介）**大声で哭き、貴妃の霊魂はどこにいるのか、泣き叫ぶ。すすり泣き、哀しみのあまり、涙枯れるまで哭く。**

（丑が香嚢を取り出す介）（これを別の嚢（ふくろ）に入れ、更に匣（はこ）に入れる介をする）貴妃様の香嚢はしっかりと収めた。女工どもはどこだ？（一同が登場）（丑）お前たちはこの玉匣を貴妃様の新しいお墓に埋葬し、すみやかに墓に土を盛るのだ。（一同が墓に土を盛る介をする）

［水紅花］あの頃の貴妃様の花の容貌（かんばせ）とかぐわしい玉体は、今や無と化して何も残らず、ただ一盛りの空虚な墓があるばかり。今日は香嚢を包んだ珠襦を収めた玉匣を、手間をかけて念入りに黄泉の国へ葬り終えた。ここにあらためて新しい墓碑を立て、涙とともに懇ろに碑文を書くことにしよう。これ以後、尽きせぬ恨みが山河に満ちわたることであろう。

（丑）お墓は完全に封をした。各人に褒美として銭一貫を与える。帰ってよいぞ。（一同がお礼を言い、叩頭する介）

（浄、貼、雑が先に退場）（丑が老旦に尋ねる介）おい、婆さん、どうして行かぬのだ？（老旦）旦那様に申し上げます。この婆は、先年、馬嵬坡のほとりで楊貴妃様の錦の襪を一足拾いましたものですから、上皇様に献上しようと思って持って参ったのです。（丑）ならば、上皇様に申し上げよう。（生に見える介）申し上げます。楊貴妃様の錦の襪を一足拾ったという女工が、上皇様に献上に参っております。（生）すぐに通せ。（丑が老旦を喚び入れ、お目通りさせる介）私め、上皇様にお目通り致します。（襪を献上する介）（生）持って参れ。（丑が取り次ぎ、生に渡す介）（老旦は起立する介）（生が襪を見て、大声で哭く介）やあ、これは確かに貴妃の錦の襪だ。なんと、芳香は失せておらぬし、蓮華の刺繍もまだ残っている。ああ、貴妃よ、（大声で哭く介）

［山坡羊］しなやかに鉤のように彎曲した錦の襪を再び眼にすれば、まだほんのりと余香が漂っている。あの頃、彼女が軽やかに翠盤の上で舞いを舞ったが、その華奢な足取りは、まるで鴛鴦の舞のようであった。また思い出す、深酒して酔いの残る夜更け、夢を見ている彼女の美しい寝姿に見入ってしまったこと。今日私は、主のいない香嚢と錦の襪を眼にして、尽きせぬ恨みにとらわれる。（生が大声で哭く介）**大声で哭き、貴妃の霊魂はどこにいるのか、泣き叫ぶ。すすり泣き、哀しみのあまり、涙枯れるまで哭く。**

高力士、その者に銭五千貫を与えよ。そしてこの地で貴妃の墓の守りをさせるのだ。（老旦が叩頭する介）上皇様、ありがとうございます。（老旦が起ち上がり、鋤を見る介）「私はこれから、二度と鋤持つ女について働くこともない。たんまりご褒美を頂戴したからには喜んで墓守りになろう。」（退場）（外が四名の兵士を連れて登場）「見る間に天地が開かれて新帝が即位され、日月のように神々しい勅額が高く掲げられるのを眼の当たりにする。」（上皇に見える介）臣は朔方節度使の郭子儀、このたび今上陛下の御命を奉じ、儀仗隊を整え、恭しく上皇陛下をお迎えに参りました。（生）卿は逆賊を平定して長安を奪還し、宗廟を建て直して天地を新たにした。実に不世出の大功である。（外）臣は総司令官を忝なくしながら、逆賊の平定に手間取りました。有罪を免れませんのに、何の功績がありましょう。（生）何を申すか。高力士、出発するよう申しつけよ。（丑）かしこまりました。（命令を伝える介）（生が礼装に着替える介）（一同が生を先導して行く介）

［水紅花］五色の雲や霊芝[3]に彩られた御車に乗って長安に帰還すれば、道の辺には慶祝の旗が溢れている。老いも

若きもみな手を取り合い、再び天願を拝して歓呼の声をあげる。これより、上皇の私は隠居となって余生を楽しみ、漢の劉邦が老父のために新豊に別墅を定めて世話をしたように、新帝（粛宗）の世話を受けることになろう。こうして、皇位は千万年も揺るぎなく継承されてゆくのだ。

驃騎大将軍の高力士が貴妃墓の改葬のために都へ帰る折しも、　徐　夤
　馬嵬まで来れば断腸の思いがする。
そして馬の手綱を返して墓丘を下りる、その足取りの何と重いことか。　杜　牧
楊貴妃を葬ったこの地を過ぎれば、尽きせぬ恨みが湧いてくる。　劉　滄
貴妃墓には空しく香嚢が残されているだけで、
　貴妃の遺体が無かったことを思い、涙がしとどに流れ落ちる。　鄭　嵎

注

（1）原文は「江山如故」。宋・王安石「金山寺」詩に「樹木有春意、江山如故人」とあり、同じく岳飛「満江紅」詞に「嘆江山如故、千村寥落」とある。
（2）原文は「襲人裾」。唐・盧照鄰の「長安古意」詩に「独有南山桂花発、飛来飛去襲人裾」とある。
（3）原文は「五雲芝蓋」。北周・庾信の「道士歩虚詞」に「東明九芝蓋、北燭五雲車」とある。

第四十四齣　慫　合

【南呂引子】【阮郎帰】（小生が登場）**大空に梧桐の落ち葉が舞い始め、又も秋風の吹く季節となった。白雲の彼方にきれいに鵲の橋が懸かり、天の河を隔てて影がゆらめいているのが見える。**

「仙界では何と別離が多く、愛する二人を遠くに別れさせ、ことさらに再会の機会を作らせることか。天空の銀河の両岸に別れさせられた我ら二人は、秋風が吹いて夜露にぬれる今宵こそが逢瀬の時。」私は牽牛です。今宵は下界では上元二年七月七夕、織女様が間もなく天の河を渡られるので、先にこの河辺に控えております。思い起こせば天宝十載、私がここで織女様とお会いした時、下界の唐の天子（玄宗）が楊貴妃と長生殿で終生の夫婦になろうと祈り誓っておりました。ところが思わぬことに、あっという間に唐の天子が楊貴妃をむざむざ見殺しにしたとは、何とも可哀想ではありませんか。

【南呂過曲】【香徧満】**絶世の美人が、千年来最もゆゆしい冤罪に遭い、永遠の情縁をむざむざと断ち切られた。その憐れさは已むことがない。二人が、生死を隔てて二度と会わず、千々に乱れる悲しみを空しく留め、永遠の愛を契った七夕の誓いに背くことになろうとは。**

【朝天嬾】【朝天子】（貼が二人の仙女に扮した雑を連れて登場）**こうして年々天上で逢瀬を重ねられるのは、下界の恋人たちの情縁が浅はかで移り気なのとは大違い。見れば牽牛様が天の河の河畔で一人落ち着かない様子、そこで車を急き立てる。**（雑が報じる介）織女様がいらっしゃいました。（小生が出迎える介）織女様、ようこそ。（織女と向き合って拝礼する介）【嬾画眉】（合唱）**二人は出会えばにっこりと笑い、深々と拝礼する。離れて暮らしたこの一年の思いは、お互いによく分かっている。**

（小生）織女様、一緒に斗牛宮へ参りましょう。（貼の手を取って行く介）「こうして手を取り合って雲中を歩めば、（貼）天衣のもすそが風にひらひら舞い上がる。（合唱）渚に鵲が集う天の河はきらきら輝き、織女と牽牛の二星が、今や斗牛宮へ集まる。」（到着する介）（雑がそっと退場）（小生）織女様、お坐り下さい。（織女が坐る介）

〔二犯梧桐樹〕〔金梧桐〕斗牛宮の帷帳には美しい瓊花の刺繍が施され、霞のような錦織の緞帳に真珠の飾りが揺れる。（貼が合唱）**この斗牛宮で、今宵こそ年に一度の逢瀬。〔梧桐樹〕こうして天空の銀河での二人の逢瀬は永遠不変のものであり、俗界のように朝に夕に顔を会わせる必要もない。〔五更転〕**願わくは、**彼ら地上の夫婦も、我々のように永遠に仲むつまじくあらんことを。**

（小生）織女様、

〔浣溪紗〕しばらくお待ちを。その人の世にも、どうしても忘れられない処があります。（貼）忘れられない処とは？

（小生）覚えておられるでしょう。**長生殿で二人が、曾て我らに向かって香を焚き、揃って誓いを立てていたことを。**

（貼）それは李三郎（玄宗）と楊玉環の事ですね。どうして忘れることがありましょう。（小生）織女様はお忘れでなかった、**殺された彼女が永久に心傷むあの世に落とされ、彼ら二人が永遠の夫婦を誓いながら、むごくも中途で生死の離別をしたことを。**

（貼）楊玉環の事をいえば、本当に心が痛みます。私は前に馬嵬の土地神の上奏によって知りましたが、

〔劉潑帽〕思えば、彼女は玄宗と生死の境を別にしながら、独り無限の愛情を抱きつつ、恨みを残して冥土に落とされたのです。そこで私は、彼女の無実を天帝に奏上し、彼女が再び蓬莱仙女に復帰できるようにお願いしました。

（小生が微笑む介）織女様はそのように配慮されましても、彼女は、

〔秋夜月〕天宮の仙女となっても、数多いる仙女の一人、連れを亡くした鵠（はくちょう）や鸞が白雲の中に独り居るようなもの。どうして仲むつまじく羽を並べる鴛鴦にかないましょう。七夕に永遠の契りを交わしたのは彼らですが、二人の団円の成否は全て織女様にかかっています。

（貼）牛郎様、私とて彼らの断たれた情縁の復縁を願わないことはありませんが、ただ李三郎（玄宗）は、

〔東甌令〕楊玉環との情愛を軽々しく断ち、永遠の誓いを先に破りました。彼女の方はひたむきに一途な愛情を注いでいましたのに。いつも薄情な男が佳人の愛を裏切るのです。これでは、伯労（もず）は東に燕は西に飛ぶようなもの。どうして二人を同居させられましょう？

（小生）織女様のおっしゃること、李三郎も当然非を分かっているでしょう。しかし、あの日馬嵬の乱では、

【金蓮子】国家の危機に直面し、兵士どもは天子の命令にも反抗して貴妃の生命を迫る始末。この情況の中で、どうして今はの際の佳人の命を救うことができましょう。玄宗がこのことをどんなに悔恨し、また悲傷に暮れたか、今日でも知ることはできません。(1)

（貼）牛郎様がそのようにおっしゃるのならば、李三郎の罪は許すことができます。もし彼が本当に悔い改めるのならば、二人の以前の誓いをもう一度実現させましょう。（二人の雑が登場）織女様に申し上げます。間もなく朝の雞が鳴く頃です。どうか、天の河をお渡り下さいますように。（貼）それでは、これで失礼します。（小生）河畔までお送りします。（二人手を取って行く介）

【尾声】どうしたことか、玄宗と楊貴妃の恋愛の評定にかまけ、この七夕の良き夜を浪費してしまった。ああ、李三郎よ、楊玉環よ、私たちが**君たちの為にあたら一夜の時間を過ごしたことを分かってくれるだろうか。**

我らは年に一度、雲や月を過ぎり、天の河で会う。　杜牧
今夜の出会いは、玄宗と楊貴妃の往事が思い出されてならない。　白居易
楊貴妃が仙女となって天宮に帰る日が来たら、　劉滄
もう金輪際、馬嵬の悲劇を恨まないでほしい。　徐夤

注

（1）ここの**【東甌令】【金蓮子】**の唱（うた）は、玄宗の薄情をなじる織女に対して、牽牛が力強く玄宗のために弁明している。従来の関連作品でも、牽牛にこのような確かな人格を与えた作品例を聞かない。この部分は、玄宗も馬嵬における楊貴妃の落命については不可抗力の無罪であったとして、次の天上での二人の団円に導く伏線をなしているが、このように、牽牛の弁明を籍りて玄宗の弁明をするのは作者の新機軸であろうと思われる。

第四十五齣　雨　夢

【越調引子】【霜天暁角】（生が登場）**貴妃を失った朕は深い愁いに閉ざされ、見果てぬ貴妃の夢を見続け、白髪もめっきり増えた。さても辛いのは佳人を早く失ったこと、孤独の夜に心を傷め、やるせない宵を恨む。**

「静かな夜の雨音に堪えかね[1]、黄泉にいる貴妃を思っては心痛める。灯明の芯を掻き立て尽くしても寝付かれない。侘しいこの南内（興慶宮）、貴妃以外の話し相手は誰がいよう？」朕は蜀より京に還御して以後、南内に隠居し、日がな貴妃を思って暮らしている。先ごろ貴妃墓を改葬した際、遺骸を人目見たかったが、まさか墓の中が空で、香嚢が一つ残っているだけとは思わなかった。果たして貴妃は登仙したのか、はたまた玉体が土と化して消滅したのか、徒にあれこれ思いあぐねつつ、どうかして貴妃に人目会いたいものだ。今夜はこの庭一面に降りしきる長雨、憂わしく半ば薄暗い灯火に対すれば、何とも寂しい思いにとらわれる。

【越調過曲】【小桃紅】秋の夜長に冷たい風が雨を吹き揺るがし、雨粒が梧桐に吹き付ける音に耳を澄ます。ひゅうひゅうざわざわと鳴る雨音は朕の愁い乱れる心をも打ち付け、止むかと思えばまた吹きすさぶ。堪えきれぬのは、この鳳凰の刺繍をした帷帳（とばり）の中に誰もいなく、香煙は消え、朕が一人坐し、ぽつんと灯る明かりに相対していること。共に雨音に耳を傾ける貴妃がいないことが恨めしく、（涙する介）**ふと生前の貴妃との歓楽の日々を思い起こせば、止めどなく涙が流れ落ちる。**

（舞台裏で初更（二十時）の時を打つ介）（小生が舞台裏で唱うのを、生が聴く介をする）おや、何処で歌っている声だろう？すごく寂しく聞こえるが、まさか梨園の旧人ではあるまいか。ひとつ簾の前へ出て、欄干に倚って聴いてみよう。（起って欄干に倚る介をする）これは張野狐の歌声だ。何の曲を唱っているのか聴いてみよう。（聞き耳を立てながら、すすり泣いて涙を流す介をする）（小生が舞台の高所に立って唱う介）

【下山虎】万山たたなづく蜀への山道に、古い桟（かけはし）が高く険しく架かっている。にわか雨が木々の梢に降りかかり、風に吹かれた鈴が激しく打ち鳴らされる。その音は恨むように、悲しむように響き、耳に纏わりついて離れない。

その音が人のいない山に響けば、魂も消え入るばかり。雨は時に緩やかになよなよと音を立てて響き、時に激しく振動して鳴り響く。貴妃を失った傷心の出来事が、この音に掻き立てられて思い出されるまま、その無念の思いを音曲に写して後世に伝えることにしよう。

（舞台裏で二更《二十二時》を打つ介）（生が悲しむ介）おお、何とこれは朕が作った雨霖鈴曲だ。思えば昔、朕が蜀への桟道を通った時、雨音に鈴の音が呼応するのを聞き、貴妃をしきりに思い、音声に合わせてこの曲を作ったのだ。今夜この曲を耳にして、蜀の桟道の悲痛を想い起こし、益々断腸の思いがする。

【五韻美】雨霖鈴の曲を聴けば、心が傷む。その寂しげな響きに、貴妃をめぐる様々な重いが駆けめぐり、私をいっそう苦しめる。永遠に続くこの恨みを、一体誰が分かってくれよう。おや、窓の外の雨音が益々ひどくなったぞ。**雨は止むかと思えば強く降り、それにつれて雨音が低くなったり、高くなったりする。私は眼を閉じて眠ろうとすれば、すぐ窓辺の雨音に夢をかき乱される。**

（丑が登場）「西の宮や南の宮に秋草がはびこり、夜の雨に梧桐の葉が落ちる。」（謁見する介）夜も更けました。陛下にはお休みを。（舞台裏で三更《零時》の太鼓を打つ介）（生）おや、もう三更だ。では小机にもたれて眠ることにしよう。ああ、今夜は貴妃のどんな夢を見られるというのか。（天を仰いで哭く介）

【南呂引子】【哭相思】二人は生と死の世界に分かれて何年もたったが、貴妃の霊魂はまだ一度も私の夢に現れたことがない。

（眠る介）（丑）陛下はお休みになられた。私も休むことにしよう。（退場するそぶり）（小生と副浄が二人の侍従に扮し、剣を持って登場）「玄宗の貴妃への思いは未だ消えやらず、その夢に入って玄宗を感動させる。」（侍従が玄宗に向かって跪く介）天子様、どうかお目覚めを。（生が目覚めて二人を見る介をする）二人はどちらから参ったのか？（小生、副浄）我らは楊貴妃様の命を奉じ、陛下をお迎えに参りました。

【越調過曲】【五般宜】楊貴妃様は、**その日、争乱の最中、惨禍に見舞われましたが、人混みに紛れてこっそり身を隠し、変装して脱出しました。**こうして、**ずっと天下を流浪[2]していらっしゃいます。**（生が驚喜する介）おおっ、何と貴妃は死んでいなかったのだ！で、今はどこにいるのだ？（小生、副浄）貴妃様は陛下を、**朝な夕なに偲ばれ、その**

恨みや愁いが消えないために、馬嵬駅の庭をきれいに掃き清め、（叩頭する介）**一刻も早く陛下が行幸され、未完となった陛下との情縁を、あの牽牛と織女の深い契りのように続けることを望んでおられます。**

（生が涙を流す介）朕は貴妃の行方をあれこれ思い悩んでいたが、何と馬嵬駅の中にいたとは知らなかった。そなた達二人、早く朕の供をして、夜を徹して貴妃を迎えに参るのだ。（小生、副浄）かしこまりました。（生を案内して行く介）

［山麻稽］［換頭］喜ばしいことに、花のような貴妃はまだこの世にあって、すぐに会えるとの知らせを聞いた。私は急がせて、御苑の夾城や複道をこっそり出る。あたりは夜更けて人もいなく、露は冷たく風は冷ややか、闇夜に道は遠いが、構わずに進んでゆく。

（末が登場し、行く手を遮る介）陛下は久しく南内にて安穏にお暮らしのはずを、またどうして深夜にお忍びで、どこへおいでになるのです？（生が驚く介）

［蠻牌令］一体どこの不埒な役人が朕の行く手を遮り、やかましく騒ぐのか？（末）臣は陳玄礼でございます。陛下、どうか速やかに宮殿へお帰りを。（生が怒る介）ちっ、陳玄礼、お前はあの日、馬嵬駅で密かに兵士をそそのかして貴妃に死を迫ったのだ。その罪は誅殺しても足りないほどだ。それが、今日もまた朕の邪魔をするのか。**君臣の礼をわきまえず、こんなに勝手にふるまうとは何だ。**（末）陛下が宮殿にお戻りにならなければ、禁軍が再び兵乱を起こすかも知れませんよ。（生）ちっ、陳玄礼、お前は朕が**皇帝の権力も無く、退位して隠居中であることを**侮り、自分の方に**威勢があり、兵士も立派であることを**ひけらかすのか。このことは**国法も許し難く、どうして有罪を免れよう。**侍従を呼べ、早くこの**乱賊を殺して、その首級を晒しものにするのだ。**

（小生、副浄）かしこまりました。（末を捕らえて殺し、退場する介をする）天子様に申し上げます。馬嵬駅に到着しました。どうかお入り下さい。（ひそかに退場）（生が馬嵬駅の中に入る介）

［黒麻令］見れば、荒れ果てた郊外に人のいない空き家や廃屋が寂しく立っている。侍従よ、貴妃はどこにいるのだ？（振り返る介）やっ、どうして一人もいなくなったのだ？ 耳にするのは、ただ**風にざわざわ揺れる樹々の音や、四方でジージーとすだくこおろぎの音、**これを聴けば、**朕の愁いや恨みがいっそう募る。**（哭く介）おお、我が貴妃

よ！ いくら呼んでも、**その花や月のような美しい姿は現れない。**おおかた、**その影も形も消滅してしまったのであろう。**（舞台裏で銅鑼が鳴り、生が驚く介）やあ、不思議なことに、あっという間に駅舎が消え、曲江のほとりに来たぞ。何と広々とした大池だ。**くずおれた垣根や石段[3]が、波打つ大池に変わろうとは思いもしなかった。**（池を眺める介）おや、大池の中から怪物が湧いて出たぞ。頭は猪（ぶた）で体は龍、爪を立て牙を出して突進してくる。何とも恐ろしい。（舞台裏で銅鑼が鳴り、猪龍に扮した怪物が首に鉄鎖を巻き、跳びはねて生を襲う。生は驚いて逃げ、元の所へ駆け戻って眠る介）（二名の金色の甲冑をつけた神人が鎚を手にして登場し、猪龍を打ちすえて怒鳴りつける介）こら、畜生め、何と無礼な！ 又もここまで逃げ出し、天子を驚かすとは何事か。さっさと立ち退かんか。（神人が猪龍を引っ張り、打ちすえて退場）（生が驚いて大声をあげる介）ああ、本当にびっくりしたぞ。（丑が急いで登場し、生を支える介）陛下、夢の中で大声を出されて、どうなさいました？（生がぼんやりして坐り、気を静める介）高力士、外の音は何だ？（丑）梧桐に雨が降りかかっている音でございます。（舞台裏で四更《午前二時》を打つ介）（生）

［江神子］［別体］朕の明け方の残夢をかき乱すのは誰かと思ったら、何とざあざあと降りつける雨音であった。恨めしいことに、それは**枕元まで響いて朕の眠るのを許してくれず、ぽとぽとと樹の梢まで音を立てている。**いっそ、**この憎い梧桐のやつを切り倒してくれようか。**

高力士、今し方、朕の夢に二人の侍従が現れ、楊貴妃が馬嵬駅にいるので朕に来てほしいと言っているそうだが、大方、貴妃の霊魂がまだ昇天していないのであろう。昔、漢の武帝が亡き李夫人を偲んだ時は、李少君[4]がその霊魂を呼び寄せて対面させたことがあったが、今日どうしてそのような術者がいないことがあろう。お前は夜明けを待って詔令を出し、貴妃の霊魂を呼び寄せる方士を広く求めるのだ。（丑）かしこまりました。（舞台裏で五更《午前四時》を打つ介）（生）

［尾声］涙がぽろぽろ真珠のように流れ落ち、梧桐の葉の上に雨音がしきりに響く。その雨はただ一つの窓を隔て、夜明けまで止まずに降り続く。

壁際に置いた明け方の灯火がゆらゆら揺れる。

呉　融

降りしきる雨音を聞き、貴妃と演じた「雨琳鈴」の曲を思い起こす。　羅　隱
天下興亡の夢から覚めれば、心はしくしく傷む。　方壺居士
今はただ、書面を伝手に、あの世の貴妃に問いかけたい。　魏　樸

注

（1）原文は「不堪開夜雨声頻」、唐・劉鄴「翰林作」詩に「已覚遠天秋色動、不堪開夜雨声頻」とある。

（2）原文は「流落久蓬飄」。魏・曹植「雑詩六首」其二に「轉蓬離本根、飄飄随長風」と。

（3）原文は「断砌頽垣」。明・湯顕祖『還魂記』第十齣「驚夢」に「原来姹紫嫣紅開遍、似這般都付与断井頽垣」とあり、また、これを襲った清・曹雪芹『紅楼夢』第二十三回にも同様の表現を引用する。

（4）『史記』巻十二「孝武本紀」、巻二十八「封禅書」、『漢書』巻九十七「外戚伝」、巻二十五上「郊祀志上」等の記事によれば、亡き李夫人の霊魂に対面させた術者は斉人「少翁」である。一方、漢の武帝の同時に、同じく斉の方士「李少君」の名も登場し、『史記』巻十二「孝武本紀」、巻二十八「封禅書」、『漢書』巻二十五上「郊祀志上」等に見える。同時、同郷の方士である少翁・少君はいかにも紛らわしいが、『史記』や『漢書』の記述内容を対照すれば、両者は別人であると考えられる。従って、故事出典からすれば、ここの「少君」は「少翁」とするのが正しい。